

全国高校野球選手権静岡大会の期間中、選手のけがの処置や投手のクーリングダウンなどを行うサポート事業に、2003年の開始当初から携わる。中東遠総合医療センターに勤務する理学療法士。38歳。

「事業は今夏で15年を迎え、定着した。」

「開始当時は4回戦以降だったが今は1回戦から決勝まで全試合で約80人の理学療法士が対応している。部活動の現場にスタッフを派遣し、けが予防を指導、啓発する学校訪問事業も11年に新たに始め、本年度までに39校で実施している」

県高野連メディカルサポート部事務局長

甲賀 英敏 さん (掛川市)

この人



「スタッフの募集、育成はどのようにしている。」

「希望者には静岡大会前のワークショップで、AED（自動体外式除細動器）の使い方やテーピングのやり方など実技を中心に学んでもらう。シーズンオフには勉強会を開いている」

「今後の課題は。」

「頭部への死球や打球の胸部直撃、選手同士の激突など命に関わる事例も想定し、一人一人の技術、知識をさらに高めた確に判断、処置できるようにする」

「将来的な展望は。」

「けがなく選手人生を全うしてもらうために、医師、トレーナー、鍼灸（しんきゅう）師、栄養士らと職種を越えて連携しサポートする体制をつくりたい」

警田西高野球部出身。当時からの潜在能力を引き出すトレーニング法を考案し、練習で実践していた。

「2017年6月16日 静岡新聞より」

県高野連・理学療法士有志

球児のけが予防 15年

県高校野球連盟と県内の理学療法士有志が取り組むスポーツ障害予防事業が今夏で15年を迎える。夏の全国高校野球選手権静岡大会で、選手のけがの処置や投手のクーリングダウンなどを行うメディカルサポート(MS)活動が定着。さらに部活動の現場に赴き、けがの予防や再発防止のための指導を行う学校訪問事業も、先進的な取り組みとして全国から注目されている。

(結城啓子)

大会でケア 学校訪問も



MS活動は全国選手権(甲子園)を参考に2003年に開始。夏の静岡大会は、初戦から決勝まで全試合を理学療法士81人がサポートした。県高野連MS部によると、全試合を対象に活動している

甲賀英敏さん(右)からけがを予防し、パフォーマンスを上げるトレーニング法の指導を受ける島田工高ナイン(島田工高)

早期発見へ 小中学生から啓発

甲賀さんから県内理学療法士の有志は、早期に故障を発見し適切な治療、指導を受けてもらうと、対象を小中学生に広げて出張検診やけが予防講座を実施している。

森町を拠点に小5〜中3までの選手約20人が活動する野球塾「ゼロベースボール」の要請で開いた講座では、選手一人一人の肩、肘の痛みや動きをチェックした後、問題点を改善するための運動の指導を行った。野球塾の鈴木克昌コーチは



メディカルチェックを受ける「ゼロベースボール」の選手ら
=森町総合体育館森アリーナ

「体の使い方が正しくないで肘を痛めたのを機に、障害予防に関心を寄せてきた。『野球肘は繰り返すと投げられなくなる。予防メニューを続けてきたので改善している』と理学療法士のサポートに感謝した。

県は全国的に珍しく、訪問事業は例がないという。11年に新たに始めた訪問事業は、MS部から派遣された理学療法士が、ストレッチや体力向上メニューの組み立てなど、各校の要望に応じて指導を行う。MS部の甲賀英敏事務局長(38)は「中東遠総合医療センター」は「日常からけが予防の意識を高めてもらい、大会中の処置件数が減るのが理想」と話す。毎年、東中西部地区2校で計24回の指導を実施する。今年、中部の訪問校に選ばれた島田工高野球部では、甲賀さんが股関節、肩甲の意欲を高めていた。骨などの可動性や安定性を高めるトレーニングを教えている。高校野球の指導に約30年間携わる増田融司監督(59)は「最近の子どもは外に出て遊ぶことが少ないせいか体が硬い。筋力強化も大事だが、柔軟性を見直す必要がある」と指導の有効性を実感している。正しい体の使い方を身に付けることは、パフォーマンスの向上にもつながる。5月に高校初本塁打を放った驚坂亮佑主将は「打撃ではバットがスムーズに出るようになり、守備も一歩目が速くなった」とトレーニングへの意欲を高めていた。